

第25回全国中学生人権作文コンテスト
但馬地区予選銅賞入賞作品

「幸せとは」

生野中学校二年 笹野穂子

ある日、ふとテレビのチャンネルを変えると、アフリカの奥地にある、学校のない村を訪ねる番組を放送していました。私は、あまり深い考えもなく、その番組に見入ってしまいました。

その村には、本当に学校がありませんでした。けれど、住んでいる人達の人数は多く、一言でいうと見るからに貧しい村、という感じでした。大人たちはもちろん、子供たちは私達より大きい子もいたし、小さい子、小学生ぐらいの子も朝から晩まで働きづめでした。一家のみんなが、働きづめでいるにもかかわらず、食べていくだけでも満たないお金しかありませんでした。

もちろん、その村には、テレビや電気がありません。だから、日が暮れたら眠るというのが当たり前の生活でした。まるで、昔の日本人達を見ているようでした。

そんな環境で暮らしているせいか、病気で死んでしまう子や、栄養不足で死んでしまう子も少なくありません。働きすぎて、過労で倒れてしまう人もいました。そんな様子を見て、同じ世界に住んでいても、全然違う環境なんだと驚かされました。でも、私が最も驚いたのは、みんなが笑っているということです。満足に食べられない、勉強ができない。それどころか、いつ死んでもおかしくないという環境の中でも、笑って過ごしている。

私は、疑問に思いました。「何で、こんなふう

うに笑って過ごせるんだろう。怖くないんだろうか。いつ死ぬかもわからないのに。」と。

しかし、その村の人は、こんな事を言いました。「では、君達は、どんな時に笑うんだい？楽しい時があったりそんな時に笑うんじゃないかい？僕達も毎日が楽しいから笑って過ごしているんだよ。」

その言葉に私は納得ができませんでした。なぜ楽しいんだろう。毎日働きづめで大変なのに。もし私が、この村に住めば、三日間も住めないだろうと。その疑問に答えるかのようにその村の人は、こんなふうに言っていました。「たしかに、この村は死んでいく人や病気で倒れる人も少なくはないよ。でも、だからこそ、みんな、協力して楽しい事を見つけ、それをみんな、楽しんでみんだ。みんな、みんなと楽しむと笑ってられるんだよ。」

たしかに、その村には、色々な行事がありました。自分達の娘や息子が結婚したり、子供が生まれたりすると、日本より盛大にお祝いします。子供が増えるときさらに人口が増えるので、もつと生活が苦しくなるはずなのに、みんな笑顔で、その赤ちゃんを見ているのです。そんな姿を見ていると、この村の人達の優しい心に感動してしまい、なんだか涙が出てきました。みんな、楽しんで、それが、この村では当たり前の事なのです。私達が住んでいる日本は、とっても平和です。この村と違って、学校もあり、テレビもあり、電気もあります。この村よりはるかに色々な物があります。でも、一つこの村に負けている物があります。それは、みんな協力するという事です。たぶん、この村の人達は私達よりも、数倍、数千倍も幸せを感じているんだと思います。もう、あとからあとか

ら涙が出てきてとまりませんでした。みんな一人一人が、自分を信じ、みんなを信じ、みんな協力し、そして明日を迎えるのだと教えられたからです。

自分を取りまく環境が悪くても、いつ死ぬかわからない日々を送っていても、今を信じ今を楽しみ、今を生きているということのすばらしさ。私は、それをみんなに知ってもらいたいと思いました。そして、みんながこの日本の意識を変えてもつともつと、いい国にしたいと思いました。

何気なく見た番組から、大切なのは一人一人が、努力することだと教えられました。この一人一人という言葉は私の大好きな言葉です。一人じゃなく、一人一人つまり、みんなということを表しているからです。一人では達成できない事もみんなであれば達成できる。そんな風に考えさせられました。大切なこと、今回学んだことを私は絶対に忘れません。きっと一生残るものだと思います。

この世の中は、すべてが平和ではありません。だからこそ、そんな思いをみんなにも知って欲しいです。そして、たった一つの事を幸せに感じる、そんなステキな人に私もなろうと思えます。

